

ジェンダー・フェミニストは リバータリアンでなければならない

藤 森 かよこ

は じ め に

本論の目的は、フェミニズムという思想の正当性の学問的根拠の大きなひとつであるジェンダー理論の再考をとおして、フェミニズムの実践をもっとも支持する政治思想であると筆者が考えるリバータリアニズムについて述べることにある。本論の構成は、以下のとおりである。まずジェンダー理論の再確認をする。次に、いまだに十分に認識されているとは考えられない、ジェンダー理論のもっとも革命的な知見を指摘する。次に、その知見を生かすことができる体制の政治哲学的土台であるリバータリアニズムについて述べる。最後にリバータリアン・フェミニストであることを本論が推奨する根拠を述べる。

ジェンダーを再確認する

ジョーン・W・スコット (Joan Wallach Scott) が、名著『性の歴史学』において、「文法においてはジェンダーとは、固有の性質を客観的に述べたものというよりは、諸現象を分類する一つの方法、社会的に合意された識別のシステムというふうに理解されている」(Scott, 1988: 28) と述べているように、もともと、ジェンダーとは種類 (kind) の意味であった。種類とは何か？ 世界に存在するおびただしい事物を観察し、事物と事物の間にある何らかの共通点を探し出し、その共通点ごとに分けて、まとめ、それらに名辞を与えることが、種類に分ける、分類する、ということである。分類の基準はいろ

いるだが、分類することによって階層や序列をつける。そうすると、おびただしい事物を把握したような気分になり安心できる。分類したからといって、実は何もわからないのかもしれない。しかし、事物の多様で多層なありようを、そのまま、ありのままに受け止めるだけでは、人間は途方にくれる。分類すれば、理解できたような気になれる。混沌に対処したような気になれる。錯覚ではあるのだが、この錯覚が認識というもののだ。

その後は、ジェンダーは、言語の男性形 (masculine)、女性形 (feminine)、中性形 (neuter)、両性共通形 (common) などの文法的性を示す用語になった。世界には数多くの言語があるが、ラテン語 (と、ここから派生した言語) やドイツ語やロシア語は、もともと性別などない事物に性別をつけている。海という自然に性はないが、フランス語では海 (mer) は女性名詞で、女性名詞につく女性単数冠詞 (la) がつく。万物を、いちいち女か男か中性か両性具有に分けることは、実に奇妙なことに思える。性別化 (sexualize) という生物にしか適用できないはずの分類法を無機物の分類にさえ適用するのは、性別というものが、人間の事物の認識手段として基本的なものであることを示している。それほどに、人間は性別にこだわる。自己把握においても、他者把握においても、性別に依存する傾向が大きい。

だからこそ、1989年代以降は、ジェンダーとは、性器などの肉体的特徴や生殖機能や、X染色体やY染色体によって区別する生物学的性のありようを意味するセックス (sex) に対して、政治的社会的文化的歴史的に生成される性のありようを意味することになった。前述のスコットは、「ジェンダーとは、性差の社会的組織化ということになる。だが、このことは、ジェンダーが女と男のあいだにある固定的で自然な肉体的差異を反映しているとか、それを実行に移しているといった意味ではない。そうではなくてジェンダーとは、肉体的差異に意味を付与する知なのである」(Scott, 1988: 2) と、的確な定義をしている。要するに、ジェンダーとは、事物を分類して、分けられた事物の集団に、恣意的に名前を与えることによって、ある特定の概念を存在せしめて、それを普遍的真理と定め、その行為の起源 (もしくは根拠の

なさ)については忘れることである。

肉体的差異とは、単に身体の形状が違っているということであって、それ以上でも以下でもない。しかし、その違いに基づいて、人間集団がふたつに分けられ、片方には男という名称を、もう片方には女という名称が与えられた。さらに、男と名づけられた集団と、女と名づけられた集団を階層化した。その階層の上位に男を置き、下位に女を置いた。階層性に加えて、さらにいろいろな意味を男という言葉と女という言葉に与えた。おおむね、肯定的意味は男という言葉に、否定的意味は女という言葉に与えた。そういうものとしての男という言葉（概念）と女という言葉（概念）は、長い歴史を通じて、普遍的で本質的なものとして歴史的にも空間的にも伝播されてきた。その過程で、階層の下部に属する（とされる）集団（女）に対する搾取という不正が正当化され自然化され、延々と続いてきた。

このように普遍的真理にされた「男性性」や「女性性」というものの根拠のなさが、つまり、それらが自然でも生得的でもなく、生成されるものであることが、学問的に論じられるようになったのは1930年代だった。アメリカの文化人類学者マーガレット・ミード (Margaret Mead: 1901-1978) は、ニューギニアの人々の暮らしの調査を通して、男女の役割や属性には互換性があることを発見した。女が仕事熱心で、男は着飾っている地域もあれば、男も女も攻撃的な地域もあるし、男も女も育児に従事する地域もあった (Freedman, 2002: 21)。

性のありようは文化的に構築されるということに、あらためて注目したのが、1960年代のフェミニストたちだった。フェミニズムの目標は、女の政治的社会的経済的権利を名実ともに確立し、性差別を撤廃することである。そのためには、肯定的性としての男に対する、否定的性としての女という伝統的概念が普遍的真理ではなく、構築されたものであり、捏造されたものであることを証明しなければならなかった。だから、フェミニスト（ジェンダー理論を支持するフェミニストという意味であるが）は、こうやってきた。女は「女」として作られる。男は「男」として作られる。ならば、自由で対等

な男女関係だって作ることができる。さらに、男でもなく女でもないような生と性のありようもあるし、女装趣味や男装趣味などの異装者や同性愛者がいるのは当然である、と。

言うまでもなく、こうした構築主義 (structuralism) に対して、伝統的な本質主義 (essentialism) からの反論は根強い。「男らしさ」とか「女らしさ」というものは、政治的社会的文化的歴史的に構築される側面を多少は持つてはいるが、根本的には、不変の普遍的な性のありようがあるという見解 (神話) を採る (ことを望む) 人々のほうが、私たちが生きる社会では圧倒的に多いかもしれない。また、文化的性のありようは生物学的性の特質から生まれたのであり、生物学的性のありようから遠く離れたジェンダーの生成はありえないとする、(科学者でもなく生物学者でもない) 生物学決定論者も少なくない。

それに対して、いや、生得的だと思われている性 (sex) ですら、過剰な意味づけをされていると主張するジュディス・バトラー (Judith Butler) のようなフェミニストの哲学者もいる。私たちの知のありよう、認識の仕組みは、かくも長きに渡り汚染されてきたので、私たちは事物をあるがままに見ることができなくなっている。そういう私たちの認識の盲点を自覚するのが、知性である。バトラーは、性的カテゴリーを混乱させ弱体化、無効化する方法として、性を演じることを提案した。過剰に女を演じること、過剰に男を演じることが、ジェンダーの攪乱に有効であることを指摘した。意図的に演じることで、性的カテゴリーの捏造性を遊戯的に暴露し、性アイデンティティなるものに揺さぶりをかけるのである (Butler, 1990, 2006: 175-203)。

ジェンダー理論と唯名論の親近性

肉体的差異に意味づけするジェンダーの発見は、人種や民族の概念の構築性や捏造性も暴露した。たとえば、白人とか黒人とか黄色人種とか簡単に言うが、「白人」とか「黒人」とかいう普遍的で本質的な属性を持つ実体があるわけではない。遺伝子学的には、人類は、黒人でもあり白人でもあり黄色

人種でもあるハイ・ブリッドであることは、すでに知られて久しい。たまたま白人とか黒人とか分類される個別の人間を、白人とか黒人という言葉や一般的概念の中に閉じ込めることを、偏見とか差別と呼ぶ。同じく、アジアとかアフリカとか欧米とか言うが、アジアの本質というものがあるのか？ アフリカという本質があるのか？ 欧米の本質というものがあるのか？ 個別の実体に先立つ普遍的な本質を意味する概念など、実在しないではないか。

このように、ジェンダーの発見による知見の広がりには、あらためて、ジェンダーの本来の意味を、私たちに思い出させることになった。つまり、おびただしい事物から分類された事物のまとまりに、恣意的に名前を与えることによって、ある特定の概念を存在せしめて、それを普遍的真理と定め、その行為の起源（もしくは根拠のなさ）については忘れるような認識の仕組みとしてのジェンダーを。ジェンダー理論のラディカルな革命性は、ここにある。私たちは、ジェンダーという認識の仕組みによって忘却されたおびただしい事物を思い出すこと、つまり、分類作業の過程で集団の中に埋没された個別の実体の存在について考えることに導かれる。つまり、構築主義か本質主義かという問題に加えて、実在論 (realism) か唯名論 (nominalism) か、という哲学的大問題に、私たちは導かれる。

実在論とは、「意識、主観を超えた独立の客観的実在を認め、このような実在をとらえることにおいて、認識が成立すると説く立場」（『大辞泉』）である。「人間」や「ネコ」という名称に、それぞれ対応する普遍的な「人間」や「ネコ」なるものが、具体的な人間やネコとは別に実在すると主張する立場である。唯名論とは、「実在するのは個物であり、普遍は個物のあとに人間が作った名辞にすぎないと考える立場」（『大辞泉』）である。簡単に言えば、不変の普遍なるものなど存在しない、あるのは個別のモノだけ、という意見である。

唯名論と言えば、ウンベルト・エーコ (Umberto Eco: 1932-) の小説『薔薇の名前』の主人公のモデルとなったフランシスコ会の修道士「オッカムのウィリアム」 (William of Ockham: 1285-1349) が有名だ。彼は、あの小説の

映画化作品でショーン・コネリーが演じた中世ヨーロッパの修道僧のモデルである。オッカムのウィリアムは、中世最大の神学論争である「普遍論争」において、あの薔薇、この薔薇という個別の薔薇はあっても、「薔薇そのもの」はないと言った。実在するのは個々の薔薇という事物であって、薔薇という普遍観念（アイデア）は実在しないと言った。だから、異端審問にかけられた。なぜならば、その思想は、普遍的真理を保証する神の実在を疑問に付すことになりかねないからである。神という普遍的実在物などない、そういう概念があるだけだと示唆しているからである。

単なる言葉でしかない（かもしれない）もののために、単なる概念でしかない（かもしれない）もののために、実体のない（かもしれない）もののために、いかほどの宗教戦争と殉教がなされてきたことだろうか。人間は、単なる言葉でしかないことに、概念でしかないことに突き動かされて、良きにつけ悪しきにつけ、何事かを成してしまう生き物であるという事実に対する感慨はさておいて、ここで強調したいことは、ジェンダーを、単に「社会的もしくは文化的特質によって表現される性」としてのみ理解しただけでは、すまないということなのである。

繰り返しになるが、ジェンダーとは、事物を分類して、分けられた事物のまとまりに、恣意的に名前を与えることによって、ある特定の概念を存在せしめて、それを普遍的真理と定め、その行為の起源（もしくは根拠のなさ）については忘れる認識の仕組みである。ならば、真に、ジェンダーなる概念を容認したフェミニストは、唯名論者にならざるをえない。ならば、「実在するのは個物であり、普遍は個物のあとに人間が作った名辞にすぎないと考える立場」になったフェミニストは、この唯名論の人間観にもっとも立脚した政治思想と、その政治思想に基づいた社会を支持するべきではないだろうか。リバータリアニズムという思想が、ジェンダー理論を得たフェミニズムと交錯するのは、この点においてである。このことを論じるためには、まずは、リバータリアニズムについて述べなければならない。

リバータリアニズム

リバータリアニズムは、日本においても、政治学や法哲学の分野では、すでによく知られているが、一般的には、まだなじみがない政治思想である。*Oxford Dictionary of English* の定義によると、「市民生活に国家が最低限の介入しかしないことを提唱する極端な自由放任政治哲学。個人の道徳は国家に関わることはないと考え。だから、他人を傷つけない麻薬使用や売春のような活動を非合法にするべきではないと考える。特にアメリカ合衆国ではそうなのだが、一般的には右翼と関係があり、伝統的リベラリズムが持つ社会的正義の問題への関心は欠如している」となるが、この定義は、意図的と思えるほどに、リバータリアニズムに対して悪意的である。アメリカにおいても日本においても、リバータリアニズムと新自由主義 (Neo Liberalism) を混同させてリバータリアニズムを2009年現在の世界的金融危機の元凶であるとして糾弾する言論が存在するが、これらはリバータリアニズムに対する無知と認識不足から起こるものである (仲正, 2008 : 139-140)。したがって、ここで、ノーマン・バリリー (Norman P. Barry) の、リバータリアニズムに関する優れた説明を紹介する必要がある。いささか長くなるが、以下に引用する。

リバタリアンは次のような基本的な存在論的前提から出発する。つまり、科学的あるいは倫理的観点から社会の現実を把握するには徹頭徹尾、個人主義的な方法論が必要だ、という前提である。人間というものを、己の行動が選択と目的の所産であるような、そういう自律的個人として捉えてこそ、自由社会の哲学は構築されるというのである。己のプライバシーや自律性が「権利」(どのように基礎づけられるにせよ) によって保護されている各個人が、お互いの価値を増すべく仲間と交流しあうものと前提されている。科学的な意味合いでは、リバタリアンは次のように論ずる。自生的な個人の活動が、いかなる意図的かつ合理的な計

画が為しうるよりも、社会的権利を隔々一層効果的に最大化するものだ、と。(アダム・スミスが「公共善のために交易をしたがる者によって多くの善が為された、などという話をついぞ聞いたことがない」と述べたのは、ちょうどこのことである)。また、道徳的な意味合いでは、次のように言われている。つまり、個人の自律性を強制的活動——わけでも国家によるものが最も顕著なのだが——によって削減する試みは、各人の「個性」とアイデンティティを破壊し、彼をある社会的・集団的実体の目的のために使われる手段と化してしまうことだ、と。もちろん、後者の議論において、個人の自律性はルールによって制限されなければならないし、各人の目標の追及は「法」、そして究極的には道徳によって抑制されなければならないが、ただ一般論としては、そういう法や道徳は、利益を追求する各人の平等な権利を各個人に対して保護する、ということに限定されるべきだ、という話なのである (Barry, 1987: 4)。

リバータリアニズムは、あくまでも、かけがえのない誰の人生とも代替のきかない独自の個別の人生を持つ存在として人間を見る。普遍的な人間存在を想定せずに、あくまでも個別の自律的存在として人間を考える。アメリカにおけるリバータリアニズムの提唱者のひとりとして目されてきたユダヤ系ロシア系アメリカ人作家兼思想家のアイン・ランド (Ayn Rand) が、「ひとつのまとまった集団の頭脳とか、ひとつのまとまった人種の頭脳というものなど存在しない。同じく、ひとつのまとまった集団の業績とか、ひとつのまとまった人種の業績なども存在しない。あるのは、個人の頭脳と個人の業績だけだ。文化というのは、区別のつかない集団の誰が作ったかわからないような生産物ではない。個々の個人の知的業績の総計が、文化である」(Rand, 1964: 148) と述べているように、リバータリアニズムは、国家や性別や人種や民族性などによって分類される集団に個人を還元することをあくまでも拒否する。人間は、どの集団に帰属しようが、いくつの集団に帰属しようが、個別の個人としての人生を生きるしかない存在である。リアルにあるの

は、個別の人間の個別の人生だけだ。この立場は、きわめて、唯名論的人間観に近い。だからこそ、リバータリアンは、個人の生存をおびやかす幸福の追求を妨害する政治経済体制を廃し、共通善の名のもとに個人の諸権利を抑圧する集団主義や全体主義や専制政治や独裁制を憎む。善の実現という大義名分のもとに、個人を指導する「大きな政府」には警戒的である。それは、個人生活への介入、規制、個人の自由の抑圧と紙一重だからである。

前述のOEDの定義が述べるように、この思想の信奉者はアメリカ合衆国に多いが、その影響はより広範囲に及んでいる。英国やカナダやオーストラリアやニュージーランドやアイスランドなどの英語圏はもちろんのこと、フランスやドイツやノルウェー、イタリア、ロシア、ギリシアにも、リバータリアニズム系の政党やシンク・タンクがある。リバータリアニズムは一枚岩ではなく、様々な立場があるのだが、どの種類の、またどの国のリバータリアニズムも、共通する要素は、法の支配のもとにおける個人の自由の最大化と、国家の介入の最小化と、自由市場資本主義の支持である。デイヴィッド・ボウツ (David Boaz) によれば、バータリアニズムの基本概念は、個人主義と、個人の権利と、自生的 (自発的) 秩序と、法の支配と、制限された政府と、自由市場と、生産する美德と、利益の自然調和と、平和である (Boaz, 1997, 16-19)。

リバータリアニズムとは、アメリカ独立革命やフランス革命などの市民革命の哲学的土台である啓蒙思想、古典的自由主義 (Classical Liberalism) の原点にもどり、その精神をより徹底して実践することをめざすものである。ここで啓蒙思想のおさらいをするなど、無用に見えるかもしれないが、リバータリアニズムという思想を正確に理解するために、あえて回り道をしてみよう。啓蒙思想、古典的自由主義の基本概念は、以下のようなものであった。

- (1) 個人には、生来、創造者に授けられた生存権や所有権や自己が所有している自分の人生を、自己の自由な選択に基づいて生きる権利＝幸福を求める権利がある。すべての人間は、創造者のもとに平等である。(自然権、法の下での平等)

- (2) 人間は、上記の権利に基づいて幸福を追求し、他人と関わりあうことで、より大きな幸福を得る。人間は自分に害を与える他人とは関わらない。よって、人と人の結びつきが生まれるのは、個人が持つ美德ゆえである。社会は、人々の美德から生まれた自生的秩序である。政府の前に、まず、人と人の結びつきである社会が形成される。(市民社会)
- (3) しかし、人間が持つ悪徳ゆえに、個人の権利の侵害が起きる。自分の権利を守るために、人々が話し合って、協力して、その権利の保護組織(the government)を設立して、その組織に権利侵害を抑止する力を信託することを契約する。(市民政府、社会契約)
- (4) このような個人の権利保護組織としての政府ができたのは、人々のもつ悪徳ゆえである。社会の中で人々に危害を加える人々がいるので、その人々の暴力を抑止できる「公的暴力」が構成員によって、政府に委託される。(制限された政府、夜警国家)
- (5) もともとが、人間の限界(人間は悪いことをするという)ゆえにできたのが政府というものである。あくまでも、政府は、個人の権利を守るために設立された組織なので、政府が巨大な権力を持つてはいけない。政府の持つ権力は、個人の集まりである市民から信じて託されたもののだから、政府の力が大きくなって、個人を抑圧することがあってはならない。したがって、政府の権力は分散されるべきである。特に、政府があくまでも法の支配下にあるためには、司法の独立は必須である。(権力分立)
- (6) もし、政府がその義務を怠ったり、個人の権利侵害をした場合は、個人(市民)には、政府に抵抗して、政府を転覆させたり、変える権利がある。(革命権)

加えて、近代市民革命を起こすことになった古典的自由主義の原則にもどることを主張するリバタリアンが支持する政策をまとめると、以下のようになる。

- (1) 経済重視、政治軽視である。政府は富を創出せずに富の分配＝税金のばらまきしかできないのだから、中央銀行による介入や公的支援などで民間の経済活動による富の産出の妨害をしてはならないと考える。中央銀行の金融操作による市場介入は言語道断と考える。
- (2) 国家は外交と国防と犯罪取締りだけやればいいとする最小国家/夜警国家を支持する。
- (3) 国内問題重視の単独主義 (unilateralism) である。
- (4) 個人の生活への国家の干渉を廃する。他人の権利を物理的強制力 (暴力) で侵害しない限り、他人が自分の選択に従って生きるのを妨害しない限り、各人が自己の選択に従って生きることは自由であり、これは譲れない個人の権利である。
- (5) 反税金である。「税金とは、正確に言えば政府が提供するサービスに対する支払いであるのだから、その支払いは自主的なもの」 (Rand, 1964: 135) であるべきであり、市民の収入の所有者は国家ではないと考える。国家の仕事は、市民から収奪したものを浪費することではないと考える。
- (6) 反軍備拡張である。軍隊は、あくまでも外国から侵略を受けた場合などの自己防衛のためにあると考えるので、過剰な軍備は税金の浪費となり国民の生活を圧迫すると考える。
- (7) 反銃規制である。強制的物理力によって、個人の生命と財産と自由の権利を侵害しようとする人々 (それが政府の場合もある) から、自己防衛するための武器の携帯と所持は基本的権利だと考える。
- (8) 税金投入による高度福祉社会には反対である。それは福祉官僚の肥大を許し、官僚による規制が拡大し、市民の自由を抑圧すると考える。独立独歩と自己責任を怠る人間を増加させると考える。最低限のセイフティ・ネットの構築は必要であるが、基本的には福祉は受益者負担体制で行われるべきであり、相互扶助を目的とする自生的組織や結社 (association) などの運営を通して実現されるべきであると考ええる。

(9) 反健康保険法である。個人が自主的に入る個人保険形態ではなく、雇用者が従業員の健康保険掛け金を支払う形式の健康保険は増税と同じであるので反対する。

(10) 反グローバリズム (anti-expansionism) である。多国籍企業の利益のために、もしくは多国籍企業の所有者である特権の人々の利益のために、国内産業の空洞化が促進することには反対する。多国籍企業の経済活動支援のための軍の海外派遣には反対する (副島, 1999: 317-322)。

なぜ「リベラル」でなく「リバータリアン」か

筆者は、先に、「リバータリアニズムとは、アメリカ独立革命やフランス革命などの市民革命の哲学的土台である啓蒙思想、古典的自由主義 (Classical Liberalism) の原点にもどり、その精神をより徹底して実践することをめざすものである」と書いた。しかし、18世紀に基本的形を成した啓蒙思想 (もしくは古典的自由主義) は、しかし形成以来、近代社会の基本原則であり続けているはずである。そのような基本原則を信奉する人々は「リベラル (liberal)」と呼ばれてきたはずである。では、なぜ、リバータリアンは、自らをリベラルと称しないのだろうか？

なぜならば、「リベラル」とは、制限された小さな政府を支持する古典的自由主義の信奉者ではなく、副島隆彦の言葉を借りれば、「社会主義的な福祉優先派の人々」「弱者救済を至上の価値と考える人々」だからだ (副島, 1999: 159)。つまり、「ゆりかごから墓場まで」国家が個人の人間を保護するかわりに個人を管理統制する大きな政府支持者であり、そのような大きな政府を運営する官僚による支配と官僚組織の肥大化を支持する人々が、「リベラル」だからだ。

この「リベラル」の意味の変質が生じた歴史的経過は、以下のとおりである。古典的自由主義の起源は、宗教改革が引き起こした宗教戦争である。信仰をめぐる血で血を洗う長年の凄惨な戦いは、脱神学化した規範を西欧人に要求し、自然法の世俗化をもたらした。正統性をめぐる価値の対立の凄まじ

さに懲りた人々は、神の摂理ならぬ「自然の法」=世界を支配する掟の存在を自明の前提にして、その法に従うのならば、あとのことは互いに不問にすること=寛容 (tolerance) を学んだ。しかし、19世紀の終わりにはすでにして、教会支配や絶対王政の圧制や宗教的不寛容の記憶が人々の記憶から薄れていた。人々は、苦闘のすえに獲得した政治的自由や個人の諸権利を守るには、普段の警戒が必要であることを忘れ、自生的秩序という概念を忘れ、自分たちの社会の問題の解決を政府にゆだね、政府の選択によって経済が動き管理されることを望むようになった。「最大多数の最大幸福」を強調したベンサム功利主義の影響は、政府の制限と個人の諸権利を擁護する必要性を疑問視させるようになった。てっとり早く多くの人々の幸福を実現させるには、有効な政策を政府が強権を発動して実践するべきであるという考えが生まれていった。

そこに第一次世界大戦である。アメリカにおいてもヨーロッパにおいても、政府は戦争に対処するために、高い課税、民間企業の国有化、検閲や徴兵などの国民管理統制を強行した。自由主義は戦争とは絶対にあいられない。自由な社会は戦争で吹き飛ばされる。個人の諸権利のうち、基本的な生存権そのものが蹂躪された。歴史上初めての大規模な近代戦は、古典的自由主義の人間像を否定した。近代戦の大量殺戮は、個人の主体性と尊厳を無効にした。個人の個性性と自立性と自律性という言葉が、戦場の死体の山という廃棄物の前では無意味なお題目となった。

その幻滅の上に、集団の利益を個人の諸権利の擁護に優先させる思想への期待が生まれた。社会は人為的に操作して計画的により良く作りかえることができるとする社会工学 (social engineering) 的発想が生まれた。1930年代の大不況時代には、資本主義に対する幻滅から、社会主義国家ソ連を美化し、マルクス理論による国家経済統制に希望を託する人々が増えた。アメリカ合衆国においては、ニュー・ディール政策は、産業、労働、統治の連邦化を促進した。政府に巨大な権力が託された。そこに第二次世界大戦が起きて、またも国民の諸権利は戦争という非常事態の要請の前に侵害された。かくして、

第一次世界大戦と、大不況時代対策のニュー・ディール、第二次世界大戦と続くにつれて、アメリカの知識人たちの間に、大きな政府を求める熱狂が起きた。この知識人たちは、自分たちのことを「リベラル」と称したが、その政治的経済的立場は、古典的自由主義のリベラリズムのそれとは反対のものであった。「リベラル」の意味の変質と逆転は、このような経緯のもとに生まれた (Boaz, 1997: 46-52)。

ニュー・ディールのリベラリズム (= 擬似社会主義, 全体主義) を否定して、「小さい政府」支持の「古き良きリベラリズム」を復活させることを試みる人々は、「リベラル」という用語で自分たちを呼ぶことを拒否し、代わりに、自分たちを「リバータリアン」と称するようになった (Boaz, 1997: 25)。第二次世界大戦後の1950年代、60年代を経て1972年にはリバータリアン党 (the Libertarian Party) も結成され、現在では、この党は、共和党、民主党に次ぐ第三政党の立場を占めている。著名なリバータリアンとしては、オーストリア学派のルードヴィッヒ・フォン・ミーゼス (Ludwig von Mises, 1881-1973) に、ジャーナリストの H・L・メンケン (Henry Louis Mencken, 1880-1956) がいる。アメリカにおけるリバータリアニズム運動の誕生に貢献した3人のアメリカ人著述家が、女性であったことは特記に値する。その3人とは、ローズ・ワイルダー・レイン (Rose Wilder Lane, 1886-1968) に、イザベラ・パターソン (Isabel Paterson, 1886-1961) に、前述のアイン・ランドである。経済学者のミルトン・フリードマン (Milton Friedman, 1912-2006) に、同じく経済学者のマレー・N・ロスバード (Murray N. Rothbard, 1926-1995) に、法哲学者のロバート・ノーズイック (Robert Nozick, 1938-2002) や、2008年のアメリカ大統領選に出馬した共和党選出の下院議員 (テキサス) のロン・ポール (Ron Paul, 1935-) がいる。リバータリアニズム系シンク・タンクには、ケイトー研究所 (Cato Institute) が、あり、リバータリアニズム系雑誌に『理性』 (*Reason*) がある。

ジェンダー・フェミニストが、リバータリアンであることの妥当性

リバータリアニズムについて長々と紹介してきたが、それは、ジェンダー理論の知見を認識したフェミニズムの実現にもっとも貢献する政治思想は、リバータリアニズムだと筆者が考えるからである。

しつこく確認する。身体的差異に過剰に意味づけして階層化する認識のありようを、もともと種類や文法の性を意味する言葉を援用して、「ジェンダー」と呼ぶことにより、(差別の根拠とされる)女の劣等性は、女として識別分類される身体を持つ人間集団に恣意的に付与されたものであることを、ジェンダー・フェミニストは指摘し、性差別の不当さを指摘した(その前に、劣等な人間は差別や搾取されて当然であるという見解の根拠が不明であるのだが)。ジェンダー的認識のありようは、性ばかりでなく、人種や民族などの身体的差異に意味づけし階層化することも含む。だからこそ、ジェンダー理論とは、人間の認識のありようの歪みを指摘する革新的哲学理論なのだ。

しかし、この用語が、広く人口に膾炙して一般化するにつれて、その意味するところが十分に理解されず、極度に単純化されただけでなく、全く違った意味で使用されるようになってしまった。ジェンダーは、単なる「性による違いをなくすこと」の意味として使われるようになってしまった。「ジェンダー・フェミニスト」とは、男女の差をなくして全部同じにするつもりの人々の意味にされてしまった。これが、1999年の改訂版の『ジェンダーと歴史学』の序文において、ジョーン・W・スコットが今後は、この用語の使用を控えたいと述べた理由であった(Scott, 1988. 1999: ix-xiii)。日本においても、ジェンダーという概念の基本的理解もなく、「男女間の違いをなくして結婚制度や家族制度を崩壊させるジェンダーはけしからん」という実に見当違いの幼稚な誤解をして騒ぐ人々が出現した。

この類の無意味な誤解と混乱は、哲学用語や専門用語が一般的に使用される場合におきがちなことであるが、この「ジェンダー・バッシング騒動」は、一般的な人々が、自己や他人の把握のために、自分や他人が属するとされる

集団に、いかに依拠しているかを示している。言い換えれば、自分自身の生き方を問わずに、自己の独自性や自己と他人との代替不可能性や個人の尊厳を考えることなく、無自覚に、機械的に、既成の分類項（集団）に自己をあてはめて、分類項（集団）に恣意的に付与された属性を自分の属性と定めて疑わない人々が、いかに多いかを示している。また、集団に自己を還元して生きること無自覚に選んだ人間は、そのような生き方から逸脱する他人を悪魔化し、または、そのような現象を非道徳なものに見なし、そのような他人や現象に、いかに否定的に抑圧的ふるまうかを示している。これこそが、差別のメカニズムである。問題は、「人間は、その人間が属する（分類される）集団に恣意的に付与されてきた属性を生きるべきであり、そうしないのは非道徳的である。悪である。そうしない人間は排除されていい」という無目覚な前提なのだ。

このような認識の集団主義、言い換えれば、身体的差異に社会的階層化のみならず道徳的階層化をともなう意味づけるような認識を知として固定化すること（ジェンダー）を回避し、人間をあくまでも個人として見るような政治体制は、何であろうか。「普遍的な人間など実在しない。存在するのは個別の個人だけである。Aとして分類される個別の人間がいるだけである。AとかBとか分類するのは、便宜上のことであって、その分類は普遍的真理でもないし普遍的に正しいわけでもない」という唯名論的人間観を受け入れることに近い政治体制は、何であろうか。もっとも個人の自由とその実践の権利を、それが他者のそれを物理的強制力（暴力）で侵害しない限り、尊重し擁護する政治体制とは何であろうか。社会的多数派（社会的にも道徳的にも階層化の上位に置かれる人間集団）に承認されることなく、社会的少数派（社会的にも道徳的にも階層化の下位に置かれる人間集団）が生きること（政治的に）支障がない環境の整備をめざす政治体制は、何であろうか。そのような政治体制を支持するのは、今のところ、リバータリアニズムなのだ。リバータリアニズムは、共通善を設定しない。個人の魂の領域には踏み込まない。生きるための条件として何を個人が求めるべきか、どんな人生を理想

とするかを規定しない。だから、リバータリアニズムは麻薬や売春を犯罪としないと、前述の OED が定義しているのである。

ここで言う自由とは、言うまでもなく「政治的自由」のことである。「政治的自由」とは、「市民が行使して当然と考えられる自由が基本的人権として立法化されていて、かつ実際に市民がその権利を行使することが公的権力によって阻止されないこと」である。日本で言えば、日本国憲法の「第3章 国民の権利及び義務」に記述されている諸権利を、実際に国民が行使できること、である。社会的自由や、経済的自由や、精神的自由や、身体的自由や、単なる気ままと政治的自由の区別がつかないのが一般的日本人であるのだが、「政治的自由」だけが、問題にすべき自由である。社会的自由も、経済的自由も、精神的自由も、身体的自由も、単なる気ままも、「政治的自由」の派生物である。

たとえば、経済的自由確保のためのカネ儲けも、カネが入る職業選択も、その職業に従事するのに必要な教育を受けることも、権利として保証されているからこそ、実践できる。そういうことが非合法であるような社会もある。たとえば、原理主義的イスラム教に支配された社会において、女は高等教育を受ける権利がない。社会的自由の確立のために、社会の悪しき慣習を無視しても、せいぜい嫌がらせされ、無視されるぐらいで、実質的な損害がないとするのならば、それは、その慣習に従うことが法制化されていないからだ。もしくは、慣習から逸脱した者に暴力的制裁を与えることが犯罪である社会に生きているからだ。精神的自由は、思想信条の自由や宗教の自由や出版言論の自由や集会の自由や結社の自由によって育まれる。心が自由に羽ばたくことを学ぶ機会を得ることは、教育を受ける権利がない世界や、学問の自由のない世界においては不可能である。もっとも単純に見える身体的自由も、移動の自由が非合法ならば行使できない。私たちが、気ままに発言し旅し歩きぶらつき買い物しているつもりでも、その私的行為は、すべて政治的なものである。自由に関する政治的インフラが整っていないところに、「気まま」など、ありえない。「気ままな行動」とは、非合法でない行為の中から選べ

る瑣末な行為の別名でしかない。

このように法が保証する自由であるところの「政治的自由」を個人にできる限り保証する政治体制は、古典的自由主義をさらに徹底させたリバータリアニズムである。「各人の『個性』とアイデンティティを破壊し、彼をある社会的、集団的実体の目的のために使われる手段と化してしまう」ことを排するリバータリアニズムである。したがって、ジェンダー・フェミニストは、リバータリアンになるのが当然であると筆者は考える。

お わ り に

リバータリアン・フェミニストは、たまたま女に分類されうる身体を持って生まれた個人の人間が、女というカテゴリーに精神的にも社会的にも政治的にも経済的にも閉じ込められることなく、彼女が自由な意志で選んだ人生を十全に生きることを支持する。個人の自由を極力保証する体制は、集団の利益が個人のそれより優先するという発想を拒否する。だから、ある個別の個人の女の選んだ行為が、集団としての女の利益に反するから、その個人の女の行為を制限禁止抑圧するということをしない。ミス・コンテストに出場する女は、容姿や性的魅力のみで女を価値づけることに加担するので、女全体の利益にはならないし、美しくない女の差別を導くからという理由で、ミス・コンテストに出場することを個人の女に禁じることはしない。それは、その個人の女の自由であると考え。ましてや物理的強制力でその自由を封じることは犯罪と考える。性差別撤廃という大義のために、すべての女を「被差別者集団」「犠牲者集団」の構成員として還元することによって、個人の女に対して抑圧的になる「集団主義フェミニズム」には反対する。また、性差別状況の解消のために政府に依存することは、女の自由な人生に対する政府の介入や管理を増大させることにつながると考え、警戒する。

リバータリアン・フェミニストは、古典的なリベラル・フェミニストと似て非なるものである。リベラル・フェミニズムは、男を普遍的人間のモデルとした人間解放思想に、女も含めることをめざした。女を男なみにするこ

とをめざした。女は女である前に人間であると主張した。リバータリアン・フェミニズムは、個人主義的フェミニズムと呼んでもいいように、集団や階級としての女ではなく、あくまでも個人としての女を問題にする（橋本，2008：22）。と、同時に、ジェンダー理論の核心である唯名論の人間観を採るので、この場合の個人としての女とは、普遍的な女という概念に回収されない、かつ、普遍的人間という概念にも回収されないひとりの人間を意味する。この考え方は、人間を、あまりに抽象的な原子的個人に還元する空想的態度に似てはいるが、全く違う。原子的個人などというものは存在しない。それは概念でしかない。在るのは、あなたという、私という、個別の人間と呼ばれる実体だけである。

リバータリアン・フェミニストは、個別の実体である人間が、「女」であれ、「男」であれ、「普遍的人間存在」であれ、「原子的個人」であれ、「日本人」であれ、「アジア人」であれ、「黄色人種」であれ、「大衆」であれ、「納税者」であれ、「無名の人」であれ、既成の言葉、カテゴリーに分類されて、階層化されることによって不利益や搾取や不当な扱いや損害を受けることに抵抗する。同時に、他者をカテゴリーに付与された概念から判断することを回避して、あくまでも個別の実体として、ありのままに理解しようと試みる。そこまで、カテゴリーから自己や他者を把握することに抵抗したいのならば、フェミニストという分類呼称も拒否すべきではないかという見解もありうるだろう。しかし、フェミニズムの目標である性差別の撤廃が実現するまでは、リバータリアン・フェミニストは、つまり筆者は、あえて、自らをフェミニストと呼ぶ。

備考

- (1) 本論文内の英語文献からの引用文については、翻訳が出版されているものは、その訳文を使わせていただいた。ここに付記して感謝したい。
- (2) Libertarianism の日本語訳には、「リバータリアニズム」と訳されている場合と、「リバタリアニズム」と訳されている場合があるが、本論では、この政治思想の一般読者向け紹介者として先駆者の副島隆彦氏の訳語に従って、「リ

「リバタリアニズム」とした。

引用参考文献

- ARMSTRONG, D. M., 1980, *Nominalism and Realism: Volume 1: Universals and Scientific Realism* Cambridge: Cambridge University Press.
- BARR, Norman P., 1987, *On Classical Liberalism and Libertarianism*. New York: St. Martin's Press. (足立幸男訳『自由の正当性——古典的自由主義とリバタリアニズム』木鐸社, 2004)
- BOAZ, David, 1997, *Libertarianism: A Primer*. New York: The Free Press. (副島隆彦訳『リバタリアニズム入門』洋泉社, 1998)
- BUTLER, Judith, 1989, 2006. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Columbia University Press. (竹村和子訳『ジェンダートラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社, 1993)
- FREDDMAB, Estelle B., 2002, *No Turning Back: The History of Feminism and the Future of Women*, New York: Ballantine Books. (安川悦子, 西山恵美訳『フェミニズムの歴史と女性の未来——後戻りさせない』明石書店, 2005)
- HAMOWY. Ronald ed, 2008, *The Encyclopedia of Libertarianism*. Los Angeles, Sage Publications, Inc.
- RAND, Ayn, 1964, *The Virtue of Selfishness: A New Concept of Egoism*. New York: New American Library. (藤森かよこ訳『利己主義という気概——エゴイズムを積極的に肯定する』ビジネス社, 2008)
- SCOTT, Joan Wallach, 1988, 1999, *Gender and the Politics of History*. London: Routledge & Kegan Paul. (荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』, 平凡社, 2004)
- 橋本祐子, 2005. 「個人主義的フェミニズム」 森村進 編著『リバタリアニズム読本』勁草書房, 2005, 22-23.
- 副島隆彦, 1999, 『世界覇権国アメリカを動かす政治家と知識人たち』東京: 講談社。
- 仲正昌樹, 2008, 『集中講義! アメリカ現代思想——リベラリズムの冒険』東京: 日本放送出版教会。

To Know “Gender” Is To Become A Libertarian.

FUJIMORI, Kayoko

This paper aims to demonstrate the logical affinity between gender feminists and Libertarians by clarifying and reconsidering the exact connotation of “gender.”

Now it is a common knowledge to distinguish sex as the biological state of being male and female from “gender” as the socially and culturally constructed state of being male or female. However, by the end of 1990s, as Joan Wallach Scott says in the preface to the revised edition of *Gender and the Politics of History*, “gender” in generally accepted usage had become something quite different from what it really means. Some regard “gender” as a synonym for the differences between the sexes. Some think that “gender” denotes the social rules imposed on men and women. Some misunderstand that gender feminists aim to eliminate the difference between men and women. Some warn that gender feminists attack manhood, womanhood, masculinity, femininity, fatherhood, motherhood, heterosexuality, marriages and family values. These misinterpretations are caused by their failure to grasp the exact meaning of gender concept.

The earliest meanings of “gender” were “kind,” “sort” and “type or class of noun.” Since the 14th century the word gender has been used as a grammatical term, referring to the classes of nouns and pronouns in Latin, French, Greek, German, Russian and other languages designated as masculine, feminine, neuter and common. In other words, “gender” is a way to recognize things by classifying them. We cannot see innumerable things as they are. To categorize them to classes according to shape, size, color and other distinctions is the first step for human beings to perceive the world. However, this perception is a judgment based on an illusion. In fact, properties, numbers and sets are merely features

of the way of considering the things that exist. Only particular, individual objects exist. To classify things never leads us to know them, since we cannot have a true appreciation of all attributes that an individual thing has.

Thus we can safely say as follows: Once you know that gender is “the knowledge that establishes meanings for bodily difference,” we are necessarily induced to accept nominalism that universals or general ideas are mere names or inventions without any corresponding reality. That’s why gender feminists have been resisting the consolidation of women into homogeneous categories.

Such gender feminists are destined to become Libertarians. Libertarianism has a greater affinity for a nominalistic view about human existence than any other political thoughts, since it advocates the maximization of individual liberty in thought and action. Libertarians are committed to the belief that individuals, and not states or groups of any other kind, are both ontologically and normatively primary. All schools of Libertarianism take a skeptical view of “the common good,” though they embrace viewpoints across a political spectrum, ranging from pro-property to anti-property (sometimes phrased as “right” versus “left”), from minarchist to openly anarchist. Libertarians share the notion that “the common good of a collective—a race, a class, a state—was the claim and justification of every tyranny ever established over men,” as Ayn Rand, one of representative Libertarian thinkers, says in *The Fountainhead*, her novel. This is why Libertarians hold that activities such as drug use and prostitution that arguably harm no one but the participants should not be illegal; people are free to choose to live any kind of life on their own risks on condition that their activities never violate other people’s rights.

Thus gender/Libertarian feminists refuse the general, collective image of women as victims and the oppressed. They seek to celebrate or protect the individual woman. They encourage women to take full responsibility for their own lives. They also oppose any government interference into the choices adults make with their own bodies, because they contend that such interference creates a coercive hierarchy and suppresses the individual woman.